

発達障がいのある子どもをもつ父親のナラティブ研究

—父親が抱える葛藤と人生における子どもの障がいの意味づけに焦点を当てて—

井原 楓 (小峰直史ゼミナール)
HS21-1003J

論文の目次

- 第 1 章 問題の所在
- 第 2 章 研究方法
- 第 3 章 分析
- 第 4 章 考察

1 問題の所在

従来の研究では、障がいのある子どもやその家族への支援を検討するために親の心的過程、特に障がい受容について多く研究されてきた。

しかし、障がい受容に関する研究については批判的な見方もある。夏堀 (2003) は従来の親の障がい受容研究が、無意識的に障がいのある子どもをもった親の目指すべきゴールとされてきたことを指摘している。中田 (2002) も専門家が親を評して「障がい受容ができていない」「できていない」と言えるほど、親が子どもの障がいを認識し受容することは単純ではないと論じている。さらに関 (2010) は、障がいのある子どもをもった母親はわが子に対して肯定的感情と否定的感情との間での揺らぎや葛藤を抱えていることが明らかにしている。

発達障がいについては、発達障がいのある本人が生きづらさを感じるだけでなく、“見えない障がい”であることにより親も周囲からの理解の得られにくさを感じており、「親の育て方が悪いから子どもが発達障がいになった」といったまなざしを向けられることもある (岩波 2022)。

こうした先行研究を踏まえると、障がいのある子どもをもつという経験や、親の心情の揺らぎや葛藤は、「障がい受容」という言葉で片づけられてきてしまった可能性があると考えられる。

障がいのある子どもをもつ親に関する先行研究は母親を対象にしたものがほとんどである。

このことは、性別役割規範によって、障がいのある子どもをもつ父母や研究者が「障がいのある子どもの子育ては母親が語るべき」であると考えていることが原因だと指摘されている (藤本 2016)。これまで父親にはあまり焦点が当てられてこなかったが、障がいのある子どもに対して複雑な感情を抱いているのは母親だけでなく父親も同様であると推察される。

そこで本研究では、発達障がいのある子どもをもつ父親が子どもや社会との相互作用を通し、子どもに対してどのような葛藤を抱きながら障がいのある子どもをもった経験を自身の人生に意味づけているのかを明らかにする。

2 研究方法

父親の会 X、または父親の団体 Y に参加する小学生以上の発達障がいのある子どもをもつ父親 8 名に半構造化インタビューを行った。分析は TEM (複線径路・等至性モデル) を用い、父親が子どもの障がいを自身の人生に意味づけることを等至点として設定した。

3 分析

発達障がいのある子どもをもつ父親たちは障がいのある子どもをもった経験について、それぞれなりに意味づけていた。価値観や生き方の変化をもたらし、自己を成長させてくれた経験として肯定的に意味づける父親たちがみられた。一方、自分の人生を豊かにしてくれた子どもに感謝しながらも、子どもに障がいがなかったら子どもの自立に悩むことはないのだろうと感じているような、肯定的な意味づけを行いつつも子どもに障がいがあることに対して肯定的感情と否定的感情の間で葛藤や揺らぎを抱えてい

る父親たちもいた。また、障がいのある子どもをもった経験を「特別ではない」と意味づけている父親や、「定型発達の親でもいろいろと悩むことはある」と感じながらも、障がいのある子どもの子育て経験を「貴重」な経験として意味づける父親もみられた。さらに、自分が発達障がいのある子どもをもったということを納得させたり、言い聞かせたりするために「自分に課されたミッション」として意味づけていたり、宗教の教えに関連付けたりしている父親もいた。

等至点（子どもの障がいを意味づける）に向かう歩みを促したり助けたりする力である社会的ガイド（SG）と、等至点に向かう歩みを阻害する力である社会的方向づけ（SD）も見出された。社会的ガイドとしては、子どもや妻、理解ある先生や地域の大人、学校の保護者、同じ境遇の父親などの存在が共通してみられた。障がいについての知識や情報、信仰が社会的ガイドとなっている父親もいた。社会的方向づけとしては、障がいがあることを理由とした希望する幼稚園や保育園、学童といった教育機関からの受け入れ拒否の経験や、理解のない先生との出会いが共通して見受けられた。さらに、障がいのある子どもへの差別発言や、障がいのある人が十分に働いたり自立したりするための環境の不整備などの障がいに不寛容な社会環境も、社会的方向づけとして見出された。

4 考察

本研究で明らかになった父親の障がいのある子どもをもった経験の意味づけは、山根（2012）において明らかにされた母親の意味づけと類似しているものが見られた。父親も母親と同様、障がいのある子どもをもったことにより自己に肯定的な変化がもたらされたり、障がいのある子どもに対する両価的な感情との間での葛藤や揺らぎを抱えていたりすると言える。一方、障がいのある子どもをもつことを自分に論ず意味づけや、障がいのある子どもの親としての経験を定型発達の子どもの親としての経験と同じよ

うに捉える意味づけなど、山根（2012）の研究では見られなかったものも明らかになった。なお、本研究で明らかにした意味づけは、親として生きていくなかで変容する可能性がある。親の心情の変化や揺らぎを明らかにするためにも、今後は意味づけの再構成プロセスについても研究していく必要がある。

和田・林（2013）は、父親は子どもの障がい理解に消極的であることを指摘しているが、本研究では「子どものために」と奮闘する父親たちの存在が明らかになった。子どもの幸せを願う親としての想いや、子どもに障がいがあることによる被差別的経験が父親を奮い立たせていたと考えられる。一方で、奮闘する父親たちからも子どもへの相反する感情が語られたことは看過できない。「障がい受容」という言葉で語りきれない親の複雑な感情に寄り添うことが、研究上でも共生社会の実現においても必要である。

主要参考文献

- 岩波明（2022）『増補改訂版 誤解だらけの発達障害』宝島社新書。
- 関維子（2010）「ダウン症の子どもを持つ母親の『障害をめぐる揺らぎ』のプロセス—障害のある子どもを持つ母親の主観的経験に関する研究」『社会福祉』第 51 号，67-87。
- 中田洋二郎（2002）『子どもの障害をどう受容するか 家族支援と援助者の役割』大月書店。
- 夏堀摂（2003）「障害児の『親の障害受容』研究の批判的検討」『社会福祉学』第 44 巻第 1 号，23-32。
- 藤本愉（2016）「障害児をもつ家族における『父親』に関する検討と展望」『國學院大學北海道短期大学部紀要』33 巻，51-62。
- 山根隆宏（2012）「高機能広汎性発達障害児・者をもつ母親における子どもの障害の意味づけ」『発達心理学研究』第 23 巻，第 2 号，145-157。
- 和田浩平・林陽子（2013）「高機能広汎性発達障害児をもつ父親の心理体験過程について」『小児の精神と神経』53 巻 2 号，137-148。